

YNU S ジャーナル
第 1 号

Journal of YNU Sports Academy
Vol.1



特定非営利活動法人
YNU スポーツアカデミー
2010

目 次

■ Y N U S ジャーナル創刊に寄せて

◇創刊に寄せて

特定非営利活動法人 Y N U スポーツアカデミー 理事長 福富 洋志

■ 指導の工夫実践事例

◇ルールを工夫してみました（学校バレーボールの授業で）

附属鎌倉学校教諭 高山尚克

■ 元気・生き生きを応援します

◇保健室はこんなところです

五附属養護教諭部会

◇わたしのけんこう大作戦（学年担任と養護教諭のIT 授業の事例）

附属横浜小学校養護教諭 菊川絵理

■ コラム

◇指導者の期待が学習者に与える影響について

東京学芸大学連合学校教育学研究科 安部久貴

◇スポーツ指導者の位置取りについて

横浜国立大学保健体育講座 落合優

■ ユニットだより

◇陸上ユニット

◇野球ユニット

◇テニスユニット

◇柔道ユニット

特定非営利活動法人 YNU スポーツアカデミー (YNUS) は、スポーツを通じて地域のコミュニケーションや青少年の健全な成長、健康増進に貢献することを目的として、平成 17 年 12 月 14 日に誕生しました。この NPO に横浜国立大学 (YNU) の OB と教職員、学生が結集して、各種スポーツの普及・振興事業を推進しています。間もなく満 5 年を迎えますが、年々各種行事への参加者が増え、携わる者全員が活動の意義を実感しております。

YNUS の活動の大きな特徴は、体育分野の一流の指導者のもとで実際にスポーツを体験することにあります。しかし、健康増進や青少年の健全な成長には、スポーツを体感するだけではなく、知・徳・体のあらゆる面からの取組が望まれます。YNUS ではこのために、「生き生き子どもセミナー」と命名したセミナーを毎回テーマを定めて計 4 回開催して参りました。これまでのテーマは、“「生き生き」を目指す子どものスポーツ指導”、“「生き生き」「健康」と生活習慣”、“たいせつにしよう、わたしのいのち、みんなのいのち”などです。各回とも、横浜国立大学の教員のほか、テーマにふさわしい講師をお招きして講演をいただき、出席者の方々と議論をして考える貴重な場となりました。このセミナーの活動をより大きく発展させるために、このたび電子ジャーナル“YNUS ジャーナル”を発刊することとなりました。このジャーナルには YNUS の調査研究ユニットが主催する研究会の成果だけでなく、YNUS の様々な活動を紹介する機関紙としての役割もあります。どうぞ愛読ください。

(注) YNUS ジャーナルの編集は、「YNUS 調査研究ユニット」が担当しております。
「調査研究ユニット」は、YNUS セミナーの開催を中心として活動してまいりました
「セミナーユニット」を組織変更し、研究会の開催、ジャーナルの発行等の業務を加えて平成 21 年より発足いたしました。

YNUS セミナー(「生き生き子どもセミナー」)について

第 1 回 平成18年9月30日(土) 13:30~16:30

1. 「子育てのための遊びとスポーツの心理学」
横浜国立大学教授 落合 優
2. 「子どもの健康維持とスポーツ(体温調節の立場から)」
横浜国立大学教授 田中 英登
3. パネルディスカッション

第 2 回 平成19年2月17日(土) 13:30~16:30

テーマ: 「生き生きとした子どもの育成～スポーツと生活習慣からの提言～」

1. 「『生き生き』を目指す子どものスポーツ(テニス)指導」
横浜国立大学教授 蝶間林 利男
2. 「『生き生き』『健康』と生活習慣」
横浜国立大学准教授 物部 博文
3. オープントーク

第 3 回 平成20年2月23日(土) 13:30~16:30

テーマ: 「元気のもと『栄養』を考える」

1. 「元気なからだところをつくる『栄養』」
明治製菓(株) 松崎 愛
2. 「骨密度って知ってますか? はかってみませんか」(説明と測定)
横浜国立大学准教授 物部 博文
3. オープントーク

第4回 平成20年6月28日(土) 13:30~16:30

テーマ: 「たいせつにしよう わたしのいのち みんなのいのち」

1. 「小学校におけるいのちの学習」
横浜市立間門小学校 小原 健人・町田 大樹
2. 「高等学校におけるいのちの学習」
神奈川県立五領ヶ台高等学校 大宮 美智枝
3. オープントーク
「考えてみましょう。いのちについて、生き方について」

(注) 第2回から、・セミナー名を「生き生き子どもセミナー」に変更
・セミナーテーマを設定

指導の工夫実践事例

ルールを工夫してみました
(中学校バレーボールの授業で：附属鎌倉学校教諭高山尚克)

「ゲームの活性化に向けたルールの工夫 ～バレーボール授業のルールの工夫について～」

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校教諭 高山尚克

1. はじめに

先日、「子どもの体力低下」についての新聞記事を目にした。我々が年少の頃は、近所に空き地がたくさんあり、防犯上の問題も少かったため、夜遅くまで野球や追いかけっこなどをして楽しんでいた。また、第2次ベビーブーム世代ということも重なり、近所に同年代の仲間も多く、異年齢の集団で遊ぶことが当たり前だった。当時はまだ、テレビゲームがあまり普及していない時代だったので、自分たちで遊びを考え、話し合っただけでルールを決めるなど、遊びの中でいろいろと試行錯誤しながら集団生活のルールや仲間との関わり合いを自然に学んでいた。

時代が変わり住宅化が進み、空き地も少なくなり、テレビや新聞で子どもが巻き込まれる犯罪報道が増えてきた。こうした時代背景もあり、子どもたちは、親の目の届く範囲内で遊ぶことが多くなった。また、テレビゲームの急速な普及により、玄関前や公園で友達同士がゲームソフトで遊んでいる姿を目にする機会が増えた。少子化も歯止めがきかず、近所に住む同年代の子どもが激減し、運動する機会や友達との関わりも減っている。登下校時の徒歩と体育の授業が唯一、運動する時間になっていたり、運動そのものの必要性を感じない子どもも多いのではないかな。

このような条件が重なり合い、「子どもの体力低下」がすすむ中、今回の学習指導要領の改訂の基本方針の1つに「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」が掲げられている。一方、基礎的・基本的な知識・技能だけでなく、「思考力・判断力・表現力」等も各教科に求められ、保健体育科教員に求められる使命は大きい。そこで授業で学習する各単元それぞれの競技特性に触れた楽しさを味わうとともに、仲間とともに運動することの喜びを伝えたいと思い、授業実践に取り組んでいる。

2. 生徒の実態

本校は、全校生徒数511名で神奈川県鎌倉市の鶴岡八幡宮近くに位置している。

入学時、生徒にアンケートを行っているが、体を動かすことが好きな生徒が多く、保健体育の授業が好きな生徒が多い。ただし、毎年、4月に行う体力テストの結果は、神奈川県の平均を下回る傾向が強く、特に男子は顕著である。

今回授業実践を行った2年生は、全ての単元においてとても意欲的に取り組み、主体的に行動することができる生徒が多く、仲間同士の関わり合いがとても活発である。そのため、お互いにアドバイスし合ったり、励まし合ったりすることが多く、とても和やかな雰囲気の中で授業が行われている。

3. 生徒の実態に応じたルールの工夫、および、その他指導に関わる工夫

本校では、平成23年度から新学習指導要領の完全実施を目指し、保健体育科でも年間指導計画等の見直しを行い、球技の履修を「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」とし、現2年生は昨年度、「ゴール型」のサッカーとバスケットボールを、今年度は「ネット型」のバレーボールと「ベースボール型」のソフトボールを履修し、3年次に「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」から2つの種目を選択できるようにしている。

各単元の1時間目は必ずオリエンテーションの時間とし、生徒はこれから学習する単元の歴史や特性について、教わった内容に加え各自で調べた内容についてまとめている。これにより、その競技特性に触れた楽しさとは何か、単元の終末には自分がどのような姿になりたいか、単元全体の見通しを立てることができる。

生徒の多くは、小学校時代にバレーボールの経験が無く、正式なルールでゲームを行おうとするとバレーボールの特性に触れた楽しさが味わえなくなるどころか、バレーボールそのものに対して苦手意識を与えてしまうことになりかねない。

そこで単元前半を基礎的・基本的な知識・技能の習得学習として、パス、レシーブ、スパイク、サーブ等を1つずつ取り出して学習した後、ゲーム中心の授業展開で、ゲームのルールを段階的に変化させることでバレーボールの特性に触れた楽しさを味わえるようにした。(表1参照)

表 1 【単元計画】

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
オリ ン テ ー シ ン	基本の練習 ①パス・レシーブ ②サービス ③スパイク ④ブロック				班別練習			ゲームⅢ (M-T-M)		
					ゲームⅡ			チーム課題練習 審判打ち合わせ		
								課題解決ゲーム		
	課題発見のまとめ									

単元におけるゲームのルール

<単元を通して共通のルール>

- ・サービスは、エンドラインより後ろから打つ。ただしアンダーハンドサービスに限り、アタックラインより後ろから打つことができる。
- ・味方がレシーブしたボールのセッターキャッチを認める。ただし、キャッチした状態（場所）から2秒以内にトスする。（キャッチ後にトスしたボールが直接相手コートに入った場合は相手の得点）
- ・得点はラリーポイント制
- ・ネットの高さは200cmとする。
- ・後衛の人はフロントゾーンからネットの高さを越えて攻撃をすることができない。
- ・ダブルコンタクトを適用する。
- ・味方がレシーブした2回目のボール以外キャッチボールを適用する。
- ・フォアヒットを適用する。

<ゲームⅠ（1点交代ゲームのルール）>

- ・コートは4.5m×18mの縦長にする。（各コートを2等分し、人数も半分にする）
- ・どちらかに1点入ったら、とられたチームとすぐに入れ替えを行い、勝ち残っているチーム側がサービスを打つ。
- ・ローテーションは行わず、自由にポジションチェンジを行ってよい。
- ・タッチネット、オーバーネット、パッシングザセンターラインはひどいもののみとる。

<ゲームⅡのルール>

- ・全面の6対6で行う。
- ・各チームエンドラインに整列し、主審の合図であいさつ。その後チームで円陣を組み、その結果によりサービス権を得る。
- ・ローテーションあり（サービス権が戻ってきたとき、時計回りに動く）
- ・タッチネット、オーバーネット、パッシングザセンターライン等はひどいもののみとる。
- ・ノータッチでボールが床に落ちた場合は3得点とし、それ以外は全て1点とする。

<ゲームⅢのルール> 基本的にゲームⅡを踏襲するが、以下の点を変更する。

- ・M-T-M形式（まずゲームを行う。その結果を振り返り練習。続きからゲームを行う）。

(審判班は、主審が全員を集めてジャッジや担当ライン、反則名等の確認を行う。)

- ・タッチネット、オーバーネット、パッシングザセンターライン等は多少、厳しくする。
- ・チーム内でレシーブしたボールのセッターキャッチを前衛（F. R、F. C、F. L）のみ認める。
- ・セッターキャッチありの3段攻撃が決まった場合、3点。セッターキャッチなしの3段攻撃が決まった場合は5点。それ以外は1点とする。

4. 工夫した授業での生徒の学習の様子とその成果

運動が苦手な生徒は、ミスをおそれてできるだけボールに触れないようにする傾向がある。そこで「ボールに触れることでチームに貢献できる」という逆転の発想から、ゲームⅠとゲームⅡの段階では積極的にボールに触れさせることを目的に、「ノータッチでボールが床に落ちた場合は3点」というルールを強調し、ミスをおそれてボールに触れない事のないようにした。また、指導においては「ボールに触れなかったら3点入るので、仮にレシーブに失敗しても2点阻止したのと同じ。」と声を掛けるようにした。これにより、「とにかくまずはボールに触れる」という意識が強くなった。また、守っている人と人の間にボールがきたときには、積極的に声を出してプレーしたり、アウトなのか判断が難しいライン際のボールに対しても積極的にレシーブする事が多くなり、運動が苦手な生徒でもチームに貢献できるようになった。ミスをして「いいよ。いいよ。2点も防いだよ！」と仲間から肯定的な声を掛けられることにより、自信がつき、積極的にプレーに参加するようになった。

競技経験がない集団でゲームを行うと、サービスが入らないのでサービスのミスによる得点が多く、入ったとしても積極的にレシーブをしないのでラリーが続かないことが多いのではないかと。そこで、サービスのルールは「アンダーハンドサービスに限り、アタックラインより後から打ってもよい」とした。エンドラインから打っても全く相手コートに届かなかったサービスがどんどん入るようになった。また、入るようになったら少しずつアタックラインより後から打つように指導することで、最終的にはエンドラインから打つ、という目標を持たせた。

また、レシーブされたボールのセッターキャッチを認め、ラリーが続くようにした。ただしキャッチしたボールを長く保持したり、キャッチしたまま歩いたりすると競技特性が失われるので、「キャッチした場所から2秒以内にトスする」というルールにした。セッターキャッチはチーム内の誰でも認められているが、当然前衛からトスされたボールが後衛からトスされるよりもスパイクしやすいので、生徒はレシーブを前衛に集めようとする。また、ゲームⅢのルールでは、キャッチなしの3段攻撃を5得点としているため、この段階でキャッチなしの3段攻撃に挑戦するチームまで出てきていた。

最後のゲームⅢにおいては、キャッチなしの3段攻撃の応酬や回転レシーブ、ダイビングしながらレシーブするなど、チーム内の声の掛け合いはもちろん、全体的にとっても白熱したゲームが続いた。

最後の授業でゲームが終わって整列したとき、生徒からは「今日はすごくバレーボールの特性に触れられることができ、とても楽しかった」という感想が寄せられたり、単元のふり返りの記入からも同様の内容が多かった。

5. 今後へ向けた改善案

生徒の実態に応じて、競技の特性に触れた楽しさを味わわせながらも、ゲームの内容を充実させるためにルールをさらに工夫していきたい。例えば、ネットの高さを上げたり、ブロックやクイック攻撃、時間差攻撃がきまった場合の点数等、身につけさせたい技能（戦術）について得点を変化させることで、学習内容の定着を図りたい。また、生徒の集団技能が高まっていくにしたがって、いくつかのルールを提示し、生徒が話し合い、自分たちの到達度段階に応じたルールを選択し、ゲームを行うことも必要と考える。

生徒が授業をきっかけに運動する楽しさや、仲間とともに体を動かす喜びを味わい、自ら積極的に運動に親しめるよう、一人の保健体育科教員として努めていきたい。

元気・生き生きを応援します

保健室はこんなところです(五附属養護教諭部会)

わたしのけんこう大作戦(学年担任と養護教諭のTT授業の事例
:附属横浜小学校養護教諭 菊川絵理)

保健室はこんなところだす

—横浜国立大学教育人間科学部には5つの附属学校があり、5人の養護教諭が勤務しています—

鎌倉小学校

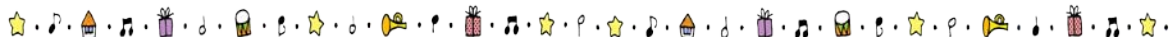


鎌倉小学校の保健室には、水をはった3つのガラスの器があります。図工の先生の授業「黙」の実践終了後、保健室に置いてみてはどうかと提案されたのがきっかけです。器のそばには、赤・青・黄色の3色の絵の具を溶かした色水が置いてあります。

水面に一滴たると、まるで宇宙のようにモヤモヤが広がっていきます。広がっていく様子をじっと見ていると、自然にポロポロと気持ちがこぼれてくるようで、「今日は、ブルーな気分。」と水の中に青の色水を一滴入れ自分の気持ちを話してくれた子がいました。

保健室には、けがをした子どもや体調の悪い子どもだけが来るわけではありません。自分の心のモヤモヤがどうしてもなく膨らんでしまったとき、ちょっとリラックスしたいとき、ひと休みしたいとき、教室では話せないことを話したいとき、暇なとき・・・十人十色という言葉がぴったりで、毎日毎日様々な表情をした子どもたちがやって来ます。子どもたちがふと立ち止まって、自分の体や心と向き合うことができる保健室でありたいと思います。

(笠野智恵)



横浜小学校

横浜小学校は、全校児童727名。一日平均27人の子どもが保健室にやってきます。休み時間にはどっと押し寄せることもしばしばです。「先生、あのね・・・」と話す子どもたち。自分のことは自分で話すことができるように、一人ひとりとじっくり向き合っています。

保健室は安心して落ち着けるところ、そして元気になれるところだと感じてほしいので、シンプルであたたかい空間を心がけています。明るいフローリングの床と、ピンク・グリーンを基調とした色合い、やさしく語りかけるような詩、ちょっぴり季節感を感じられる掲示物。そんな保健室の人気者は、くまのぬいぐるみ。くまの頭をなでると痛いところが治るというわさがあります。保健室でほっと一息ついてエネルギーを充電し、また頑張れる子どもを応援しています。

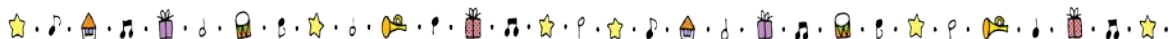
(菊川絵理)



鎌倉中学校

本校は各学年4クラス、全校生徒511人の学校です。けが等の訴えによる利用者数よりも体調不良などの訴えによる利用者数が多く、その原因となるところに精神的なストレスが影響していることが多くあります。「気持ち悪い」「だるい」などの症状の訴えの背景には、友人関係や親子関係などの人間関係の中で、自分を見失ってしまっていることがあるようです。様子を見に来た担任の先生や教科の先生、部活顧問の先生、たまたま通りかかった先生などが入ってきて、一緒に話をしたり聞いたりする中で、生徒自身が自分の姿を見だし、症状が改善されることがあります。また、保健室の中には相談ルームがあるので、スクールカウンセラーと触れあうことができ、本格的な相談活動へ繋がるケースもあります。様々な価値観の中で、生徒たちが「自分」が取り戻せるように、人と人をつないでいく保健室であれたらと思っています。

(真庭美保)



横浜中学校

横浜中学校の保健室の扉は、いつも開いています。いつでも入りやすく、また、教師の側も今誰がいるのかな、とわかるようになるべくオープンにしています。中学生という時期なのでもちろん、プライバシーを保てるようなスペースも用意しています。

本校の保健室の平均来室者は、1日あたり約5人と数の上では多くはありません。けがと病気では、けがによる来室者が昨年度は約2倍でした。今年度は、9月から新型インフルエンザの大流行が本校でもみられ、全校の罹患率は約50%に昇りました。その影響により、今年度は来室者のけがと病気の比率は、6:4になっています。医療機関の受診を要するものもあり、医療機関への受診付き添いも養護教諭の重要な役割になっています。

中学校は、教科ごとに担当教師が変わります。生徒は、学級担任・教科担任・部活顧問等いろいろなかわりの中でそれぞれの顔を持っており、その隙間の表情を見せるのが保健室です。生徒が見せるこれらの表情をつなぎ合わせ、教師間で共有できることが生徒をみていく上で大切なことだと思っています。そんな生徒の表情を保健室で日々見守っています。

(平沼裕子)



特別支援学校

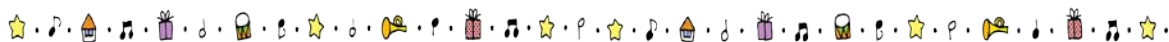
附属特別支援学校では 78 名（小学部 21 名・中学部 21 名・高等部 36 名）の児童生徒が、障害や病気と向き合い、自分に合う自立をめざして学んでいます。まじめで頑張り屋のこどもたちがほっと落ち着けるように、保健室内の壁と扉をピンク色にしました。

痛い・苦しい・辛い・疲れた・心配・困った・緊張した時に過ごす保健室。養護教諭とかかわることで「楽になった」「人とかかわるって心地よい」と思えるように「丁寧な言葉がけと手当て」を心がけています。



ぶつけたところを冷やすと、「気持ちいい。保健室にきたからもう大丈夫。」と担任の先生と教室に戻る小学 1 年生。けがをした翌日、「もう治りました。昨日はありがとうございました。」とお礼に来る小学 6 年生。「疲れたので休ませて欲しい。」1 時間程ベッドで熟睡…すっきりして、「もうよかったので教室に戻ります。」と言う中学 3 年生。「中学生の時に辛いことがあった。この学校に入学して 3 年間、元気に登校できた。社会人になってもがんばる。」と話す高校 3 年生。

こどもたちの「成長しよう、よりよく生きよう」とするパワーに、元気とやる気と勇気をもらいながら、温かな日だまりのような保健室を創っていこうと思うのです。
(菊地美和子)



横浜国立大学 五附属養護教諭部会について

メンバー紹介

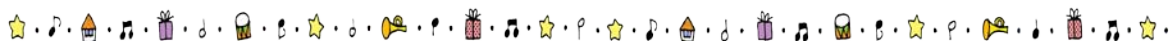
鎌倉小学校	笠野 智恵
横浜小学校	きくかわ えり
鎌倉中学校	真庭 みほ
横浜中学校	ひろぬま ひろこ
特別支援学校	平沼 裕子
	きくち みわこ
	菊地 美和子



H. 21. 8. 4～5 宮崎観光ホテル
全国の国立大学の附属学校養護教諭が集い、研究協議並びに総会が開催された宮崎へ。このとき、決まった五附属養護教諭部会の合言葉は、『言うときは言う。やるときはやる！！』現在実行中。

部会の役割 【1ヶ月に1回、各学校輪番制で開催】

- ① 各学校における児童生徒の実態を把握するために情報交換を行う。
- ② 養護教諭部会での協議内容や研究成果は、各附属学校及び大学間で共有する。
- ③ 関附連、全附連、学術大会等に参加して見聞を広げ、研究成果を発信する。
- ④ 神奈川県、横浜市、川崎市との連携をはかりよりよい研究のあり方をさぐる。
- ⑤ 養護教諭の資質の向上と養護教諭同士の親睦を図る。



『わたしのけんこう大作せん』（学年担任と養護教諭のTT授業の事例）

本校は、横浜国立大学に5校ある附属学校の1つで、児童数727名、学級数18クラスの小学校です。横浜市中区にある丘の上に位置し、みなとみらい地域や横浜ベイブリッジが見える景色は、まさに“横浜”が感じられます。天気のよい日は富士山も眺められる学校で、子どもたちはのびのびと学習をしています。

本校の子どもたちの特徴として、広い通学区域から電車やバスを使って通学していることがあります。当然、通学時間が長いので、朝早く起床して学校へ向かい、帰宅が遅い時は、夕方5時近くになるようです。その後、遊びや習い事や宿題をするので、常に時間に追われた多忙な生活を送っています。

今回、3年生で体育科保健領域の授業『わたしのけんこう大作せん』を行ないました。学年担任（教諭）と私（養護教諭）とで、TT（ティームティーチング）つまり二人体制で、授業を行いました。主な内容は、表の通りです。

●単元の流れ

時間	単元の流れ
1	「健康」について考えよう。 ～健康とは？ 自分の生活を調べてみよう 生活ふりかえりカードに挑戦～
2	健康に過ごすために大切なことを考えよう。 ～「食事」「運動」「睡眠」の生活リズム～
3	調和のとれた生活の他に、健康に過ごすためにはどうしたらいいのか考えよう。 ～「清潔」手洗い・衣服の洗濯～
4	健康に過ごすために自分ができることを考えよう。 ～環境にも目を向けよう「換気」「明るさ」 おうちの方からのメッセージ～

全4時間の授業をするにあたり、工夫した点がありますので、二つ紹介します。

（1）夢と希望にあふれる保健学習の始まり

保健の授業は、小学校3年～高等学校3年までの10年間あります。つまり、小学校3年生は、10年間続く保健学習との出会いとなります。もし子どもたちが「保健って楽しい」「健康は大切」と感じられたら、これから続く保健学習がより楽しく、そして生涯にわたり健康な生活を送ることのきっかけとなると考えました。

3年生の内容は、自分の生活行動を振り返ることから始めました。そこで、問題点にばかり目を向けるのではなく、自分の長所を感じられることも大切にしました。長所をもっと伸ばすために、どうしたらいいのかな？そのような視点で、実践的理解を促し、日常化へと結びつくことを期待しました。ここでのエピソードを紹介します。

・Aさんは、運動や外遊びが大好きです。休み時間は毎日外へ行き、汗びっしょりになるまで遊んでいます。生活ふりかえりカードをつけてみると、「運動」は毎日◎ですが、「食事」と「睡眠」は時々△がついてしまいました。そこでの問いかけを、「苦手な食事・睡眠を◎にするためにどうしたらよいか？」ではなく、「得意な運動がもっとできるようにするためにどうしたらいいかな？」としました。Aさんはふりかえりを続けながら、食事をしっかり食べるとパワーが出るからいっぱい体を動かせること、もっと睡眠をとると体が元気になることを学び、次第に「食事」「睡眠」の◎が増えていきました。

（２）学校＆家庭から子どもの健康を見守る

子どもの健康に関しては、家庭との連携が欠かせないと感じています。学校にいる間は教員一同で子どもたちを見守っていますが、実際、生活時間の大半は家庭で過ごしています。学校で学習したことをより定着させたいという私たちの思いから、保護者の協力をいただくことにしました。

学習に入る前に学級懇談会で、そして学習の終わりにメッセージカードを書いてほしいというお願いをしました。私は以前、生活ふりかえりカードの端に「おうちからのメッセージ」欄を作り、書いていただくという取り組みをしたことがありますが、保護者のメッセージというよりは反省になってしまったり、視点が定まらなかったりと、あまりうまくいきませんでした。そこで TT を組む教諭と相談し、効果的にするポイントを考えました。

① 学習内容をしっかり伝える。

学級懇談会で、学習内容を保護者に説明しました。実際に使用する予定の写真資料や紙芝居、板書予定を提示し、４時間でどのようなことを学ぶかをしっかり理解していただくことで、もし家で子どもが取り組んでいたら、すぐに褒めたり助言をしたりできる、そしてメッセージに書いていただきたい視点を明確にすることへもつながると考えました。

② 「書き方のポイント」までつけて・・・

４時間目に向けて、メッセージカード記入のお願いの文書、封筒、白紙のメッセージカードをつけて配布しました。文書には、生活ふりかえりカードを見て、「こんなことができるようになったね」という称賛と、子どもへの願いを書いてほしいと文例までつけました。

私たちの強引な（？）熱い思いが伝わり、素晴らしいメッセージを全保護者から回収することができました。

さて、４時間目はどうなったかというと・・・。子どもたちには内緒しにて保護者からメッセージを集めていたので、メッセージをもらった子どもたちは大興奮です。ここで、そのメッセージをいくつか紹介します。

「B 君、生活ふりかえりカードをつけるようになってから、時間を意識して行動できるようになったね。すいみん時間が短くなるとかぜをひきやすくなるから、夜更かししないように気をつけようね。」

「最近、嫌いなものも一口は食べるから出してね、というようになったね。とってもえらいよ。お母さんはこれからも栄養のバランスを考えてご飯を作るから、C ちゃんも残さずに食べて、ぐんぐん大きくなってね。」

「生活ふりかえりカードで、運動が足りないことに気がつきましたね。運動するとおなかも空くし、早く眠れて、いいことづくめだよ。これからは、天気の良い日は外で遊ぼうね。」

子どもたちに健康でいてほしいというのは、養護教諭である私の切実な願いです。普段は保健室で私から一方的に保健指導をすることが多い毎日ですが、今回は一人ではなく、学年担任教諭と保護者と子どもたちと一緒に学習をすすめていくことができました。一人と言うより、きっと効果は２倍、３倍のはずです。学習が終わっても、子どもや保護者と「３年生のとき、けんこう大作せんやったよね。」と話すことができたらいいなと願い、これからも子どもたちの健康を見守っていきたいと思っています。

写真1 わたしはどんな生活をしているかな？



写真2 おうちからメッセージが届いたよ。



コラム

指導者の期待が学習者に与える影響について
（東京学芸大学連合学校教育学研究科 安部久貴）

スポーツ指導者の位置取りについて
（横浜国立大学 落合優）

指導者の期待が学習者に与える影響について

皆さんは、普段スポーツを指導している時に学習者に対してどのように接しているでしょうか。指導の仕方は、指導者が各学習者に対してもつ期待によっても変化するとされています。そして、期待によってもたらされた個々に対する指導の仕方の違いは、学習者の能力だけでなく、心理的な発達にも影響を与えると考えられています。一般に、指導者の期待が学習者に与える影響は4つの段階に分けて説明されます(右図参照)。まず、指導者は学習者の個人要因、パフォーマンス要因に加えて、心理的要因から各学習者の能力を評価して期待を形成します(第1段階)。次に、指導者が形成した期待は、各学習者に対する指導の仕方に影響を与え(第2段階)、学習者は指導者の接し方が異なることに気がつく(第3段階)。この選手の気づきは、指導者による能力評価への気づきを伴うものであり、最終的に学習者の能力や心理的側面は指導者の期待通りに発達すると考えられています(第4段階)。

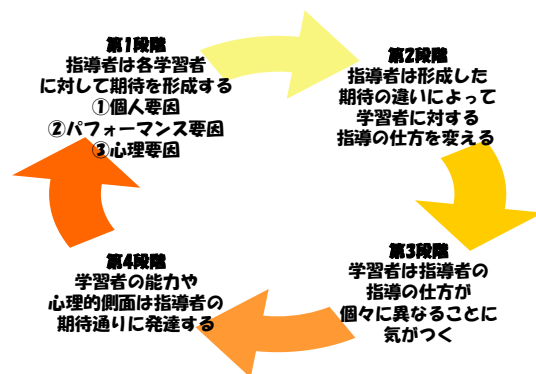


図1. スポーツ指導過程における期待の影響

(Becker & Solomon, The Sport Psychologist, 2005を和訳)

順を追って各段階を具体的に説明すると、指導者は、まず各学習者の人種、性別、身長や体重などの個人要因によって学習者の能力を評価します。さらに、学習者の過去のスポーツ競技歴や瞬発力、持久力、運動技能テスト結果といったパフォーマンス要因やスポーツに対する積極性や自信といった心理的要因の評価も含めて、総合的に各学習者に対する期待を形成します。

このようにして形成された期待は、指導者の指導の仕方に影響を与えます。例えば、もし指導者が学習者Aの能力を高く評価して大きな期待をかけた場合、能力を低く評価し、あまり期待をしていない学習者BよりもAに対して積極的にコミュニケーションを図ろうとすることから、BよりもAの方がより長時間の指導を受けるとされています。また、指導時のフィードバックの仕方も期待の程度によって異なり、期待している学習者Aに対しては技術的なフィードバックをする一方、期待していない学習者Bに対して褒めたりはするものの、技術的フィードバックなどをすることが少ないとも言われています。

このような、指導者の期待度を反映した指導の仕方の違いは、学習者の能力の発達に影響を与えます。指導時間や用いられるフィードバックの違いは、学習者自身のプレーに対する技能評価や技能改善の程度に影響を与えることから、期待され、長時間の指導と多くの技術的フィードバックを受ける学習者AはBよりも自身の能力を向上させやすいのです。そして、このような指導の結果、学習者AとBの能力は指導者の期待通りに発達していきます。

指導者の期待が心理的側面に与える影響については、指導を通じて指導者の能力評価が学習者自身に伝わることによって起こります。“褒める”という指導行動を例に挙げれば、期待の大きな学習者Aとそれほど期待していないBが同じようなプレーを成功させた時に、Aに対しては何も言わないのに対し、Bに対しては「よくやった!!」と褒めたとします。この時、もし学習者BがAは褒められていないのに自分だけ褒められたと気がついた場合、指導者はAの能力は高く評価しているのに対し、自らの能力はあまり高く評価されていないと感じる可能性があります。このような経験が積み重なることにより、指導者の期待は学習者の心理的発達にも影響を与えるのです。

これまで述べてきた様に、指導者の期待は指導行動となって現れ、学習者の能力向上および心理的発達に影響を与えます。各学習者の能力を最大限に向上させ、肯定的な心理的発達を可能にするためにも、今一度各学習者に対する自身の指導の仕方について、振り返ってみてはいかがでしょうか。

スポーツ指導者の位置取りについて

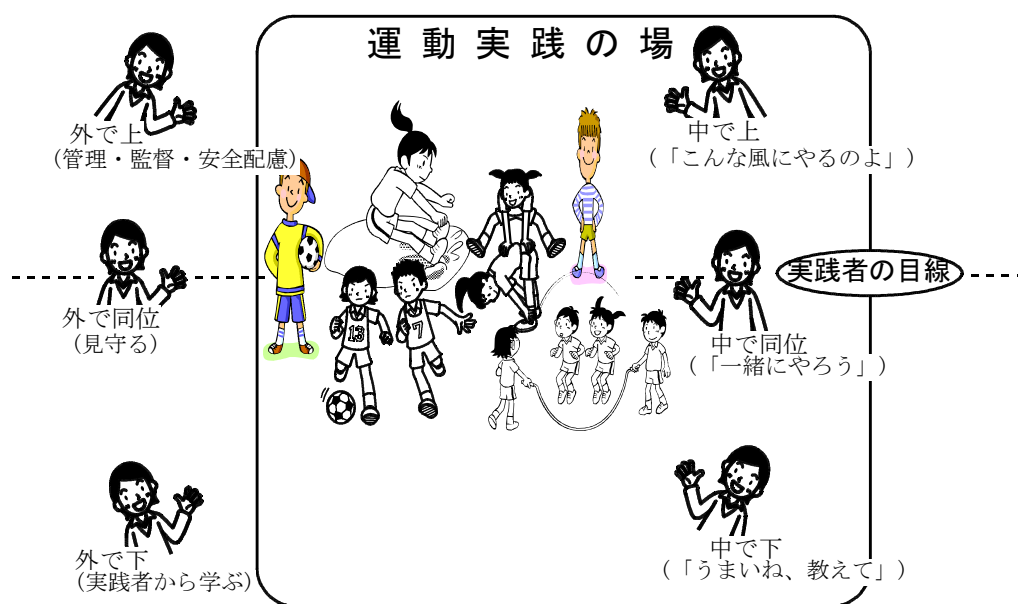
運動実践者とスポーツ指導者との関わりについて、こんな見方はどうでしょうか。運動実践者と指導者の関係を、両者の(物理的・心理的)位置関係から考えてみるという見方です。

幼児教育においては、「子どもの目線で子どもたちの中に入って」指導・支援を行うことが推奨されています。スポーツ指導場面でも、そうした観点から、運動実践の場の「中」か「外」か、運動実践者の目線の「上」か「下」かという観点から、運動実践者とスポーツ指導者との物理的・心理的な位置関係を考えることができます。下の図はこれを模式的に示したものです。かつてのスポーツ指導者には、「文句を言わずにしっかりとついて来い」というタイプの指導者が少なくなかったようです。そうした指導者は、典型的に、「外」で「上」に位置づけられでしょう。

先の幼児教育の例をスポーツ指導者に当てはめれば、運動実践の場の「中」で「同位」の位置にいることが望ましいように思われるますが、それは常に正しいとは限りません。たとえば、安全確保のために運動実践者の行動をしっかりと把握し、管理する必要が生じた場合には、「外」で「上」は非常に効果的な位置取りとなります。指導者が運動実践者とともに運動しながら自ら模範を示す時は、「中」で「上」の位置取りとなでしょう。

このように、運動実践者と指導者の間では、いつでも無条件に正しいという位置関係は特定できません。その時々にもっともふさわしいと考えられる位置取りを柔軟に採用することが望まれます。

指導者の位置取りの観点からスポーツ指導者にとって基本的に重要なことは、①今自分がどの位置にいるかをしっかりと認識しておくことと、②ある一定の位置取りに固着もしくは固執しないこと(意識的にも、無意識的にも)だと考えられます。



(横浜国立大学 落合 優)

ユニットだより

陸上ユニット

野球ユニット

テニスユニット

柔道ユニット

陸上ユニット

☆活動紹介

陸上ユニットでは3つの活動を通じて、地域貢献活動を行っています。

① YNUS ジュニア陸上クラブ

小学生を対象とした陸上クラブです。毎週土曜に練習を行い、各種大会へ出場しています。

② YNUS 陸上教室開催

月に1度、三種類の教室を開催しています。

「走幅跳・三段跳セミナー」 → 専門の選手を対象としたトレーニングを行います。

「子供のためのスポーツ教室」 → 小中学生を対象に、ランニングの基本を指導します。

「こころと身体の健康トレーニング」 → 様々な年代の方が実施できるエクササイズです。

③ YNUS スポーツ指導者ミーティング

スポーツ指導者を対象に知識・実践を学ぶ場として実施しています。

☆入賞まであと一步！！よこはま国際ちびっこ駅伝

3月6日(土)日産スタジアムにて「第19回よこはま国際ちびっこ駅伝」が行われました。この大会は横浜を中心に小学生が8000人以上参加する大きな大会です。YNUS ジュニア陸上クラブからは、駅伝の部・ロードレースの部あわせて20名が参加しました。

あいにくの雨の中での試合となりましたが、選手たちは練習の成果を発揮し、力走してくれました。5年生男子駅伝では、200チーム以上が参加した中、入賞まであと一步の18位という好成績を収めました！6年生となる来年以降の活躍が期待されます！！

6年生にとっては卒業前最後の大会となりました。これまでクラブを支えてくれた6年生たちの走りを見られなくなるのは寂しいですが、クラブでの経験を活かして、中学でもそれぞれの目標に向かってがんばってください！

写真はレースを終えた6年生です。→



☆YNUS ジュニア陸上クラブ

メンバー募集中

主に小学生を対象にした陸上クラブです。毎週土曜14時～16時、国大グラウンドで活動しています。各種小学生大会へも出場しています。

詳しくはHPを参照ください。
<http://www.ynus.jp/index.htm>

☆ YNUS ジュニアトレーナー販売開始

YNUS ジュニア陸上クラブオリジナルトレーナーをクラブメンバー向けに販売を開始しました。寒い季節の練習に好評です！



おもて



うら

<野球ユニット活動だより>

野球ユニットでは以下のような地域野球発展のための活動を実施しています。

< 1 > 少年野球セミナー（野球教室）

毎年、6月と1月の計2回、近隣の小学生に対し、横浜国立大学硬式野球部選手とともに野球の楽しさを学びます。

昨年のテーマは、打撃：「強く打つ！正しいバットスウィング」「遠くへ飛ばそう！」

守備：「捕球から送球までのフットワーク」

走塁：「ベースの回り方」「離塁のしかた」などでした。



22年1月は120名の子供たちが参加しました。

< 2 > 少年野球指導者講習会

年1回、野球指導者のための講習会を実施しています。

内容は、「野球選手のためのストレッチング」「少年野球のためのトレーニング法」「成長期の子どもの障害予防トレーニング法」などした。昨年までは、7月に実施していましたが、22年度からは12月頃を予定しています。

< 3 > 高校生のための体験練習会及び大学説明会

8月はじめに、大学でも野球をやりたいと考えている高校生に対し、大学野球選手との体験練習会を実施し、また横浜国立大学の説明会も同時に行っています。毎年、10～30名の高校生が参加しています。今年も開催予定です。

< 4 > YNUS 少年野球大会

10月末からの土日3日間を利用して軟式少年野球大会（4年生以下）を開催しています。昨年は近隣の6つの野球チームが参加し、素晴らしいプレー続出の好ゲームが展開されました。今年度も同時期に開催予定です。

テニスユニット

* 活動紹介

テニスユニットでは、A-TAC 会員向けのテニス教室の開催、テニスコート周辺の環境整備、および3回の一般向けの親子テニス教室と1回の社会人テニス指導者セミナーを開催し、地域貢献活動を行なっています。

1、親子テニス教室

YNUS, A-TAC, (財) ヨネックススポーツ振興財団後援。

第1回 8月16日(日) 12時から4時まで、参加者は21組親子で42名。

指導者 蝶間林利男、九鬼まどか(プロコーチ)、横浜国立大学テニス部部員、A-TAC 会員 12名

第2回 11月22日(日) 午後1時から4時まで。参加者は26組親子で52名。

指導者 蝶間林利男、横浜国立大学テニス部部員、A-TAC 会員 17名

第3回 平成22年3月14日(日) 午後1時から4時まで。参加者は24組親子で49名。指導者 蝶間林利男、横浜国立大学テニス部部員、A-TAC 会員 15名

いずれもヨネックススポーツ振興財団の補助を受けられたので傷害保険に加入しても参加費1000円/名に抑えることが出来た。

講習内容は、日常会話の少なくなっている父と娘、母と息子など親子のつながりをテニスによって深めること、さらに、ヨーロッパで行なわれているコーディネーショントレーニングを取り入れての神経・筋の協応を目的としたスキルアップドリルを練習の中心に位置付け、サービス、グランドストローク、ボレー、スマッシュなど基本技術を少人数クラスで密度の濃いドリルを行なって習得させることである。

また、子どもの発育・発達に即したオーソドックスなカリキュラムによってケガのないナチュラルなフォームの形成を目指し、やる気とテニス基本技能を高めることなどである。

2、社会人テニス指導者セミナー

YNUS, A-TAC, (財) ヨネックススポーツ振興財団後援。平成21年12月6日(日) 12時から4時まで。参加者38名。指導者 蝶間林利男、横浜国立大学テニス部部員10名、A-TAC 会員17名

講習内容は、会社やクラブでテニス指導に携わっている社会人に最新のテニス理論に基づいた指導法を提供し、実践を通して習得してもらうことを目的とし、ウォームアップから、コーディネーショントレーニング、フットワークを重視したスペインドリルさらにクーリングダウンまで一貫したテニストレーニングシステムを紹介した。

1年に1回では少ないということで来年は2回に増やす方向で検討している。

3、A-TAC テニス会の実施

2 回／月で実施

参加者は月平均 A-TAC 会員 15 名、横浜医師会 15 名

4、トピックス

- ・ 今年度もヨネックススポーツ振興財団には、助成金の交付やラケットの試打会など親子テニス教室、社会人テニスセミナー等の開催のサポートをしていただいている。
 - ・ 横浜国大テニス部に A-TAC と OB 会が連携して電動球出し機を寄贈した。
- ＊ このような講習会は大学の地域貢献事業の一環として行なっているが A-TAC 会員、現役テニス部員の協力が得られなければ成立しない事業である。改めてそのサポートに対して深甚なる感謝の意を申し上げたい。
- ＊ テニスコートの夜間照明 2 面分を A-TAC メンバー及びラポームメンバーで大学寄付した。
- ・ 平成 21 年度最終支援事業として
 - ① 第 4 ～ 5 面コート間に設置する観覧ベンチの寄付
 - ② 第 6 面コート外側の整備事業

平成 22 年度事業計画

- 1、A-TAC テニス教室の開催
 - ・ 親子テニス教室の開催（6 月、11 月、3 月）の 3 回
 - ・ 社会人テニス教室の実施（12 月）
- 2、A-TAC 会員向けテニス教室の実施（随時）
- 3、A-TAC テニス会を毎月 2 回実施

（文責 蝶間林利男）

柔道ユニットの現在

代表 木村昌彦

柔道ユニットでは、YNUS キッズ柔道クラブ、YNUS 柔道クラブの2つの事業を中心に活動を展開しています。キッズ柔道クラブは園児から小学校6年生までを対象とし、週3回の開催で一回の練習時間は2時間程度実施しております。入会当初は、挨拶ができなかったり、泣き虫だった子ども達が日増しに逞しくなっています。また、キッズを卒業した子ども達の中から中学校に進学し部活動で柔道を続けていく子ども達も増えてきています。キッズ発足の初期目標であった柔道を通しての人間教育、生涯スポーツへの方針が活かされてきていると感じております。各種の柔道大会にも積極的に出場しており、入賞する子ども達も増えてきております。

さらに、YNUS 柔道クラブでは、社会人を対象に柔道を提供しております。生涯スポーツとして柔道を行いたくても実際、柔道を行う環境（場所、仲間）がない人達に柔道環境を提供し、今、様々な年齢層、職種の人達が道場を訪れています。練習に来る人達の目的も様々で、強くなりたい、楽しみたい、人と触れ合いたい等、多岐にわたっています。そして、それぞれが同じ場所で、違った目的で少し違った練習を展開し自由な発想と活動をしています。

2009年度は大学の体育館の耐震工事のため、一旦はYNUSとしての活動を停止しました。このまま消滅してしまう危険性もありましたが、柔道学生の是非、継続して子ども達の成長に貢献したいという意見から存続を決定しました。そのような状況で11月以降から体育館が使えるようになりましたが、YNUSとしての全体的な活動というより、分散的な活動を実施していました。本格的にYNUS キッズとして活動するのは2010年4月からとなります。今後、地域連携や子ども達の成長に関わっていくためにさらに前進していきたいと考えております。

Y N U S ジャーナル 第1号

発行日：2010年3月31日

発 行：Y N U スポーツアカデミー

編 集：Y N U S 調査研究ユニット

連絡先：特定非営利活動法人 YNUスポーツアカデミー(YNUS) 事務所
〒240-0067 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
横浜国立大学教育人間科学部第3研究棟102号室